

人間には大なり小なり何かしら臭味があるものだ。本人はわからないから平然としているわけだが、はたから見るとよくわかる。

臭味が強いと人には好かれないし、交友は狭くなる。従って社会人として一生の間には大変な損をする。だから誰でも、何とかして臭味のない、誰にも好かれ、誰からも頼られる様な人間になりたいと思っているにちがいない。それに成功したら、楽しい人生のしあわせを味わって死ぬことが出来るのだと私は思っている。

臭味が出る素も色々あるだろう。然し何か邪念があるといふことは一番いけない。必ず人には嫌われる。しかし、邪念などは無いのだが、何となくある種の臭味のある人も少くない。

どうも之は殆んど皆「うぬぼれ」から来ているように思われる。

うぬぼれとは自己に関係する事物を何でも過大評価するくせのことだから、そういう人の言動には、他人から見ると、どうしても正しい観察や思考は出て来ない。その上何となく厭味がついて廻る。だからうぬぼ

れというものもかなり厄介な寄生虫だ。

古来うぬぼれを退治する為に、色々な工夫や修業が考えられたり奨励されたりして来ているが、私はそのうちで剣道の修行はその雄たるものだと信じている。皮肉なことに剣道をやり始めると初めの内は皆うぬ

ぼれの塊まりになる。それもよい。負けるくやしきも修業のはげみになる。

しかし剣道では相手の心を読めるようになることが一番大事なことから、四五段にでもなつて来ると、眼を見たり、手を見たりして相手の色を読むことを自然に会得して来る。しかしまだ心の中までは読めない。

試合は心と心との対決である以上、相手の心の中を

はつきり感得することが何よりも肝要だが、自分の心にうぬぼれのある限り、絶対に出来るものではない。

## 剣道修業とうぬぼれ

矢野一郎

を知ったつもりで居ても、己の実体を赤裸々に知った上での比較でなければ間違いである。

由來人間にとつて、自分の実体を知ること位難しいことはない。

二千年も前に杜牧は「睫在眼前長不見」と言つて、求道の難しさを指摘している通り、これが我国の武道の極意ともなつて「眼前の睫」の教えがあることは周知のこと。誰でも自分の背中を見ることが出来ないのに、他人は皆見ている。その自分を、他人が見ると全く同様に客観的に観察出来る心を作ることに、之があらゆる人間修行のゴールである。

「己を知る」とはこのこと。剣道修業の最高の目標である。

元來人間は、何の職業か当てられる様では臭味が抜けていない証だ。坊主の坊主臭い、弁護士士の弁護士臭い、などは凡て未熟な証

拠と言われるように、一目見ても俺は剣道は強いぞという態度や顔付きでは、人間としては大成出来ない。

こういつ人たちは大悟一番臭味をぬける為の剣道修業に眼を開くことが大切だ。

社会人として各分野に働らく人は、臭味を少しでも早く洗い落す心の修業が何よりも大事だ。そこに気がつけば、剣道そのものも早く上達するだろう。

「うぬぼれ」は剣道で一番邪魔なもの。之を退治することが修業の本質だと私は信じている。

【筆者は第一生命保険相互会社元会長・社長、全日本実業団剣道連盟名誉会長】